

【熊本県賞】

水と共に生きる日々

熊本県 真和中学校 三年 田畑 心那

昨年の元旦、石川県能登半島で最大震度七の揺れを観測する大地震が発生した。新年の明るい雰囲気から一転、突然切り替わったテレビに映しだされた緊迫した状況に、「これは現実なのか？」と自分の目を疑ったことを今でも覚えている。連日のように報道される津波や土砂崩れ、建物の倒壊などの痛ましい被害。日本三大朝市の一つとされる「輪島朝市」も火災の被害を受け、死者は五百名を超えた。そして、復興への道を歩みだした矢先に奥能登豪雨が発生した。冠水や土砂崩れで多くの人が打撃を受けた。そんな信じがたい状況を目にする中、私は書道を共に頑張る石川の学生達のが気が気でなかった。その一人に志賀町に住む中学生がいる。彼女が住んでいる志賀町は震度七の大きな揺れに見舞われた被害の大きな地域だ。その揺れは元旦書き初めの稽古をしていた彼女を襲った。幸い命は助かったものの断水が続いた。先が見えない不安な日々……私だったらくじけてしまうだろう。しかし、彼女は地震から八日経つと書道の練習を再開したのだ。断水で水が使えなかったので、雨や雪解け水を使って水書き書道の稽古をしたそうだ。私は震災に負けない彼女の姿に感銘を受けた。

水は、地震による津波や九月の豪雨など石川やその周辺の人々に災いをもたらした。その一方で、自然の水の恵みにより、彼女は困難な状況の中でも大好きな書道が続けることができた。炊き出しで救われた人は何人いるだろうか？きつと数えきれないほどいるだろう。水があったからこそ救えた命だ。

ふり返ってみれば、どんな苦しい時でも、水は私達の生活と共にあった。私は今、熊本という水に恵まれた地で暮らしている。蛇口をひねれば、当たり前のように水が出てくる日々が目の前にある。しかし、本当にその生活は限りなく続いていくのだろうか？

今、住宅や市街地の広がりなど様々な理由で熊本の地下水量は減少し

ている。このままでは「水の都くまもと」が危ない。私達にできること、それは一人一人が自分事として水問題について考えることだと思う。水は私達の生活に必要不可欠であり、それを守っていくのは私達の使命だろう。使わない時は水を止める、レストランで出された水は最後まで飲む、自分出来る小さなことを探し、実践することで、大きな結果につながるはずだ。

私は能登で起きた災害から水について考え直すことができた。水が引き起こした災害に負けなかった学生が書で表した「能登」の字にはとてもたくましく、輝いていた。私もその字に込められた思いを忘れず、力強く、水と共に日々を歩みたい。